SILK on-ket

シルク温ケット

●

毛布屋さんがつくった

心地よい眠りのための

顔専用ブランケット

米阪パイル織物株式会社

yyypile.com

●顔にかけるシルクの毛布!?

「シルク温ケット」は、今までに無かった顔専用ブランケットです。

寒い季節、身体は布団を掛けて暖かいのに顔だけが冷えて眠りにくい。でも顔に掛ける毛布は、ない⇒顔はとてもデリケート⇒肌に優しいシルクを使うと良いのでは？
特に、私たちが作るシルク・パイル織物はベルベットをしのぐ滑らさ、柔らかさがあります。（それは言葉では言い尽くせません）

シルク温ケットは毛布を作るメーカーとして日々実感していることを、出来るだけ多くの人と共有したい、そして心地よい眠りを提供できればと、そんな想いから開発が始まりました。

●「顔専用」ならではの特徴

- 保温と保湿のダブル効果
- 柔らかく、サラサラ（ベタ付かない）
- 毛羽が抜けにくい、くすぐったくならない
- お手入れが簡単（家庭で洗え、乾きやすい）

● 穏やかな 3 配色

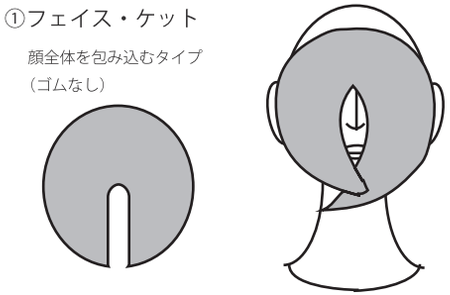
ブラウン　パープル　グレー

● プロダクト

乾いた状態で、パイル面を肌に当てて
お使い下さい

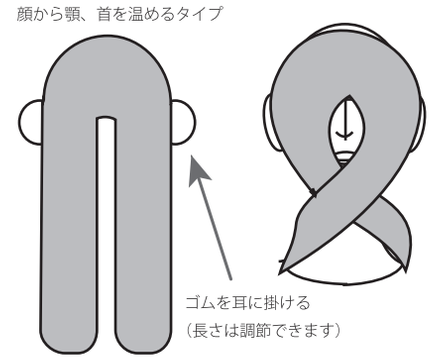
①フェイス・ケット

顔全体を包み込むタイプ
（ゴムなし）



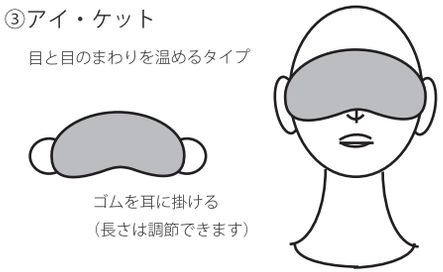
②フェイス＆ネック・ケット

顔から顎、首を温めるタイプ



③アイ・ケット

目と目のまわりを温めるタイプ



● 2 種類の繊維によるダブルパワー

シルク（天然繊維）⇒ **保湿力**

＋

マイクロファイバー（化学繊維）⇒ **保温力**

‖

シルク温ケット

シルク

- 人の肌に近いタンパク質でできている
- 綿の 1.5 倍の吸水性・発散性があり蒸れない
- お肌の乾燥を防ぎ、うるおいを補う
- 「繊維の女王」といわれる美しい光沢

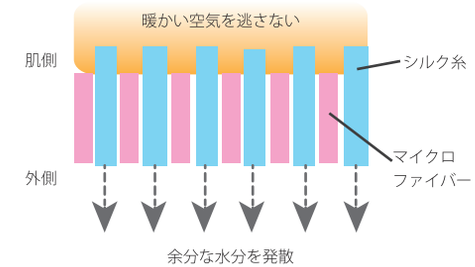
マイクロファイバー（ポリエステル）

- 綿やアクリルよりも保温性に優れる
- 吸水性に優れている
- 丈夫でへたりにくい

● 肌側の畝（うね）構造がポイント

シルク糸の間にマイクロファイバー糸を配列

- シルク糸はマイクロファイバーより
  パイルを長くする⇒シルク糸が肌に当たる
- マイクロファイバーが体温を逃さず暖かい



SILK
on－ket

● 組成

パイル糸
- シルク 55%
- ポリエステル 45%

地糸
- 経糸：ポリエステル 65%
  レーヨン 35%
- 緯糸：綿 100%

● お手入れの方法

- 洗濯機の取り扱い説明書に従い、中性洗剤をお使い下さい
- 洗濯ネットを使用し多めの水量で洗って下さい
- タンブラー乾燥はお避け下さい
- シルクは直射日光に弱く黄変しますので陰干しをして下さい
- ブラッシングをすると風合いが良くなります
- 使用中及び洗濯中に毛羽が抜けることもありますが、機能的には問題ありません

取り扱い絵表示

製造・販売

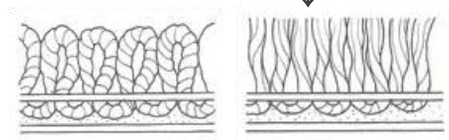
米阪パイル織物株式会社

和歌山県橋本市神野々 720 番地

● パイル織物とは？

about pile fabrics

生地の片面または両面に毛足がある織物のことをパイル織物といいます。
パイルは輪になっているループタイプと房になっているカットタイプがあり、高野口ではカットタイプのみが織られています。



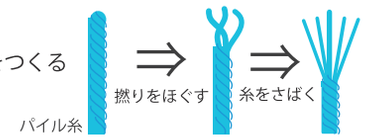
ループタイプ　　カットタイプ

パイル糸は、ごく細い糸を数本撚り合わせて作られており，撚りをほぐし更にさばくことで立ち上がった毛羽となります。よこ糸でしっかりパイルを抑えるので抜けにくく切れにくい＝ホコリが少なく滑らかで柔らかい仕上がりになります。

1, 織り上がりの状態…パイル糸が立ち上がっている

織物の断面

2, 毛羽をつくる



3, パイル織物が完成

●高野口パイル織物の歴史

history of Koyaguchi fabrics

高野口（こうやぐち）は世界遺産・高野山の麓にあり、平安時代から霊峰の参詣口として人々に親しまれてきました。江戸時代には人や物が行きかう宿場町としても栄えたところです。

織物のルーツは約 400 年前、関ケ原の戦いの後、九度山に蟄居した真田昌幸・信繁（幸村）父子により伝えられた真田紐の綿織物技術であると言われています。江戸時代には綿織物業が盛んになり、やがて明治になると織機が導入されパイル織物へと発展していきます。

紀伊半島の内陸北部にある高野口は、寒暖差が激しく、更に多湿な地域です。先人たちはこの厳しい気候でも快適に過ごせる織物を作ろうと努力を続け、世界に誇れる品質とバリエーションを持つパイル織物の一大産地を築きました。

● 高野口の織物を共創する

We co-create Koyaguchi fabrics.

土地の気候や歴史、先人たちの努力、そのどれが欠けても生まれることが無かった高野口のパイル織物。現在も幅広い分野に使われていますが、長年関わり続けてきた私たちでさえも気づかない可能性が秘められていると確信しています。

私たちはその可能性を引き出し、地域とともに高野口の織物を進化・発展させ、何らかの形で後世の人々に伝えてゆきたいと考えています。

E-mai　info@yyypile.com

Web　https://www.yyypile.com

please follow us.